

## 「花びらの隊長さん」

十五回生 伊藤(山崎) 發子

千里山の思い出というと、皆様それぞれに美しいこと、甘酸っぱいことがおありでしょう。私にも忘れられない光景があります。それは五年生になったばかりの桜の頃でした。当時の桜は、入学式や新学期の頃に満開になるのでした。

新学期の下校の途次私と仲良しの友人と二人が通学用の駅のガードから地上に出ると、左側に広場がありました。今はどうなっているのでしょうか。すぐ横は郵便局でした。小学校の教室くらしいの空地に、兵隊さん二、三十人が休憩をしておりました。坐っている人、軍帽を枕に横たわっている人が春の陽を浴びて、とても戦時中とは思えない静かな情景でした。銃を三本一セットにして立ててあるのが幾組か見えました。それらの中に一人、りりしい隊長さんらしい若い将校さんが、銃を杖にして立ち、隊員達を見守っている姿が目に入りました。

私たちが見るともなく立ちどまっておりますと、その隊長さんが近づいてきて「君たち何年生?」「五年生か、

じゃあ十一だね。大きくなったら僕のお嫁さんになってくれる?」と言うので「きゃあ、年が違いすぎるわ」と言う、「そんなことないよ。僕は士官学校を出たばかりだから、二十歳過ぎたばかりだよ。丁度いいんじゃない?」と大阪弁でなく言います。彼は私ではなく、友人をしつかり見つめているようでした。彼女はすらりと背が高く、ハイカラで大人びていました。「ひゃあお嫁さんなんて」と笑いながら言うと、ちよつと淋しそうに「そうか」と言つて、彼はもとの位置に戻り、緊張した面持ちで直立しました。

それだけの話なんです、私にはこの年になっても、このときの情景が芝居の一幕のように思い出されます。昭和18年、戦況は悪化し始めておりました。あのイケメンの隊長さんはどうなされたのでしょうか。恐らくお嫁さんを貰うことも恋人を作ることも許されず、激戦地で「突撃——」と叫んで敵弾に当たって「名誉の戦死」をなさったことでしょう。当時イケメンで秀才の何万という青年が命を落としたことでしょう。千里山に来ていた兵隊さんたちは大阪城の連隊から行軍で歩いて千里山まで来ていたのでしょうか。随分前の千里山誌に、佐井寺の某所に軍隊の休憩所があったとありました。恐らく彼らは佐井寺と千里山とを間違えたのでしょうか。その後千里山駅前で軍隊を見たことはありません。あの時、

私たちはNoと言わずに「お嫁さんになりた——い」と無邪気に言っておけば良かったのに。桜の花びらを見るたびにあの若い隊長さんを思い出します。

たしか永井路子さんの談話に戦争中の学徒動員のお話があり映像も映されました。学徒動員令が出され在学中の学生も戦地に行くことになり、その壮行会が神宮球場であり、何千人かの現役学生たちの大行進があり、学生服に角帽をかぶった学生たちが銃をかつぎ激しい雨の中を堂々の行進をしました。その最中に見送りにきていた女子学生たちが泣きながら、群になつて階段を駆け降り、グラウンドになだれ込みました。すぐさま係の人に制止されましたが、それは瞬間の出来事で記事にもならず、写真もありません。しかしその女子学生を見た男子学生たちは、見向きもせず、行進を続けました。

永井路子さんは戦時中の思い出の中でこの光景が一番心に残っていると言っておりました。

あの何万人という学生の中で、何人が帰ってきて、もとの学業に戻れたでしょうか。それを思うと、千里山の将校さんと桜の花びらが重なって思い出されます。

#### 神風特攻隊のこと

広辞苑では「太平洋戦争中自殺的な攻撃を行った日本陸海軍の部隊」とあり、神風については「命知らずで向こう見ずなさま」とあります。飛行機で敵艦に体当たりして攻撃する方法でした。

「神風」がつくのは、鎌倉時代、蒙古襲来の折、暴風が吹いて日本が救われたと言われていることに由来しています。最初から自爆することを前提とし、無事帰還することは予定せず、出発時には燃料を往路分しか搭載していませんでした。実際には目的を達する前に、敵に攻撃され、打ち落とされることが多かったと言っています。太平洋戦争中、敗色濃くなった時期に考え出され、多くの若者が犠牲となりました。今の私達はこれら悲愴な若者たちの犠牲の上に暮らしていることを忘れてはならないと思います。

\*注 神風特攻隊は海軍が編制した特攻隊に付けられたもので「知覧」のように陸軍が編制した特攻隊には「神風」の名は付いていない。

特攻の戦果としては撃沈した艦船四十七隻に対し戦死者は陸海合計で三、八四八名(出典により異同あり)一隻沈めるために八十一名の未来ある命が失われた由で

#### 出陣学徒壮行会

明治神宮外苑競技場(後の国立競技場)で開かれ、関東地方中心の入隊学生約7万人が行進した(昭和18年10月21日)。

NHK映像アーカイヴより(編集部注)



兵力不足から学生の徴兵猶予が取り消され入隊の壮行会が全国各地で開かれた

す。ただ、回天など人間爆弾を含む特攻による米軍側の戦死者も八千名を超すと言う数字があります。

#### 追記

文中の「女子学生」について

当時、国、公立大学では女子は入れませんでした。女子学生は国立では現在のお茶の水女子大学と奈良女子大学のみで、私立大学では東京女子大・日本女子大・津田塾大などの他慶応大学、早稲田大学などありました。

当時「女子学生」の結婚相手は、今行進している男子学生たちなのでした。

又、「私の友人」というのは三分一さんがいちあやこ禮子さんのことです。彼女の父上はニチメン(当時日本綿花)の幹部だった方で、戦中に政府の命令でビルマまで行かされました。乗船されていた\*客船が敵に襲われ沈没し、乗組員の殆どが亡くなりました。それで彼女たちご一家は郷里の山口県湯田温泉へ帰られました。

\*注記 21平田坦さんが本号に「大洋丸事件」と題して三菱商事に勤務されていたお父上の多鹿男様が遭難されたこと、沈んだ船体の発見に関わられたことを、詳しく書いておられます。何と三分一さんのお父上もこの船で遭難されました。

その後彼女は優秀な方と結婚されました。彼女とは千二小の同窓会でお目に懸かり旧交を温めたり、また、彼女が福岡へ来られた時お目に懸かりました。やはり私のような中年太りのオバサンではなく、すらりとした令夫人という感じでした。

今回もお電話して、千里山駅前の話を千里山誌に載せてもいいかお尋ねしましたら、快諾して下さいました。お元気そうで嬉しかったです。

思えば五年生の学芸会の劇で、幸せな家庭のストーリーで、彼女が主役でした。その稽古の折、彼女が突然泣き出したので私が代役をつとめました。当然本番では彼女は立派に演じられましたが、なぜ泣き出したかという点、父上の思い出が蘇り、涙が溢れてきたとおっしゃっていました。当時民間人が多数「産業戦士」として戦地に行かされ、多くの無名の人々が命を落としました。

今年一月大相撲が終わった翌日、そういう民間人を悼む碑が建てられ、その設立記念行事に天皇皇后両陛下が白菊の花束を捧げられました。

またお正月の朝日新聞に昭和天皇の和歌の原稿が発表されました。そこには「かなし」「はずかし」という

一九四五年四月から六月の沖縄敗戦までの間、陸軍の各地からの出撃者は一〇三六名、なんと四割以上が「知覧」から出撃したそうです。

現在は愚かな戦争を二度と起こさないことを祈念する「知覧特攻平和会館」が建ち、特攻機の実物とともに、二度と帰還することのない出撃者の遺書、遺品、出撃直前の元気な笑顔の写真が多数展示され、訪れる人々の涙を誘っています。

沖縄、広島、長崎は訪ねましたが、元気な内には非一度訪れたい場所です。

その後、少し調べましたが、「知覧」は薩摩の「小京都」と呼ばれ、古い歴史のある町で、武家屋敷と庭園が多数あり、銘茶の産地であることも知りました（現在の地名は鹿児島県南九州市知覧町郡）。名所が多く観光に訪れる方々も多いそうで、鹿児島や指宿に近い場所です。

伊藤發子さんは今年に入り、福岡からご息が整形外科病院を開いておられる、鹿児島に転居されました。温暖な鹿児島で益々お元気に過ごされますことを祈ります。

表現が幾つもありました。「かなし」は日本独特の表現で、悲し、哀し、しみじみした、いとしいといろんな心理を言います。

私たち戦中派はこの「かなし」の思いを胸一杯に抱きつつ余生を送ります。

又、こういう古い話を根気よく載せて下さる千里山誌の編集者の方々に厚くお礼申し上げます。

伊藤 發子

「知覧」のこと

「花びらの隊長さん」や「学徒出陣」、「神風特攻隊」を拝見して、少しだけ思うことを書かせて頂きます。

伊藤發子さんより以前から原稿や校正のやりとりの中で「知覧茶」を頂くことがあり、とてもおいしいお茶でした。

実は小生にとって「知覧」は陸軍特攻隊の基地があり、前途ある若者達（少年兵も多かった）四三九名が沖縄決戦時に撃つて、戦死した悲劇の場所としか知りませんでした。

今年の3月13日付の朝日新聞朝刊に

「知覧茶」好調 静岡に迫る

の大きな見出しがありました。

記事によると『全国有数のお茶どころながら知名度が低めで、静岡への原料供給地に長らく甘んじていた鹿児島県、その原因の一つが「ブランド」の乱立だった。そこで2年前、10年に及ぶ協議の末に最大産地の統一ブランドが誕生。「知覧茶」としてのPRが実り、最近の市場シェアは静岡に迫る勢いをみせている。』とありました。

先出の南九州市は知覧、頰娃、川辺の3町が合併したもので、合併を機にブランドの統一を図りました。その成果として全国シェアが34・5%となり首位の静岡県の41・0%の背中が見えてきたそうです。

（編集部 奥田記）